

【個人研究】

## 大学生における大学への適応に関する検討

谷 島 弘 仁\*

### A Study of Students' Adaptation to College

Hirohito YAJIMA

The conditions pertaining to students' adaptation to a college environment were analyzed using seven items (working outside college, deciding on future career, and so on). A questionnaire listing these items was administered to 207 students studying in two colleges, along with the Self-rating Depression Scale; this was done in order to examine the relationship between adaptation to the college environment and depression tendency. A correlation analysis revealed a positive relationship between the depression tendency and item 2: "I have thought of retiring from my college." Other results of analyses are presented and the implications of these findings for student counseling are discussed.

**Key words:** adaptation by students, college, depression tendency

学生の適応、大学、抑うつ傾向

#### 問題と目的

近年、大学への適応の困難な学生が増加している。その一つは学力面での適応困難である。すなわち、基礎学力が不足している学生や、授業についていけない学生が見受けられる。なかには学習習慣や学習態度が全く身に付いていない学生も散見される。これには、推薦入試の多様化やAO入試の普及により、大学への入学において学力よりも意欲や生活態度が重視されるようになってきていることや、大学によっては定員割れが生じるなど無選抜の状況にあることが背景としてあげられる。つぎに、大学での人間関係や社会生活において適応の困難な学生が多く見いだされる。鈴

木(2004)は、「オトナに成長するということは、社会への適応が可能となることである。」と述べているが、心理的に未成熟なまま大学に入学し、人間関係や社会生活に適応できない学生が増加しているように思われる。白石(1998)はこのような大学生の特徴を「大学生の幼稚化現象」と呼んでいる。重松(2005)は、大学生のなかに衝動性が強く、自己の存在に不安を感じ、またひとりであることを極端に恐れ、絶えず他者を巻き込まずにはいられない境界例的な人が女子を中心として増加していることを報告している。青年期は第二の分離個体化期と呼ばれるが、境界例的な学生の増加は青年期の発達課題に問題を抱える人が多いことを示している。このことは、大人になりきれないままの学生が増えていることと関連しているだろう。

\* やじま ひろひと 文教大学人間科学部臨床心理学科

従来、学生の大学への適応は本人の自助努力に任されてきた。しかし、最近になって大学側はこのような学生の適応困難の問題に対して様々な対応策を立てるようになってきた。授業については、学生の授業満足度を高めるためにFD (Faculty Development) により改善を図る試みがなされており、成果が報告されている(近藤, 2005)。大学教員による授業改善の試みも報告されてきている(宇田, 2005)。また、新入学生の大学への適応を促進するために初年次教育や専門科目への導入教育、レメディアル教育を充実させる大学が増加している。さらに、学生の学習を支援するためのサポートセンターを設置したり、学生相互によるサポーター制度を導入している大学もある(山下, 2004)。学生の心理的な問題については学生相談室がこれまでに多くの大学で設置されてきたが、最近では学生相談への新たな試みがなされている(宇留田, 2003)。

大学への適応が困難となる学生に対しては、大学を中心とする周囲からのサポートが必要とされる。そのため、大学が様々な対応策を考え、実施することは学生にとって望ましいことである。しかし、以上のような大学の対応は、学生の視点というより教務的な視点に重点が置かれているように思われる。すなわち、大学の対応はFDやレメディアル教育などの学習面が重視され過ぎているのではないだろうか。

大学新入生が入学後に困ったことについて、4月～10月の継時的変化を検討したところ、レポートの書き方やノートの取り方などの学習スキルについては著しく改善されているものの、授業時以外のキャンパスでの過ごし方といった適応面では4月～10月にかけてほとんど変化が見られないということを濱名(2005)は報告している。濱名の報告が示しているように、学習面だけの改善にとどまらず大学で

の人間関係や社会生活において適応の困難な学生に対する対応が必要とされる。

学生の大学への適応困難を改善し適応を促進するためには、学生の視点から大学への適応の現状と適応を困難にする要因を探っていく必要がある。そのため、本研究では大学生へのアンケート調査を通して大学への適応に関して検討することを目的とする。

## 方 法

### 調査対象

A県の国立大学法人B大学の学生82名(男子59名, 女子23名)および同県の私立C大学の学生125名(男子38名, 女子87名)、合計207名(男子97名, 女子110名)が調査対象となった。B大学の学生は、理学部、農学部、工学部に所属している者がほとんどであり、1年生が中心であった。C大学の学生は文学部に所属しており、外国語を専攻する学生と初等教育を専攻する1年生および2年生が中心であった。

### 調査内容

大学生の大学への適応を把握するために7項目の質問項目を作成した。Table 1に項目を示した。また、項目4に「はい」と回答した学生に対しては自由記述により理由を尋ねた。つぎに、大学生の抑うつ傾向を測定するために、Zungによって作成され、福田・小林(1983)によって日本語版が作成されたSDS (Self-rating Depression Scale) 20項目を使用し

Table 1 大学への適応を測定する質問項目

項目1 「サークルで活動していますか。」
項目2 「アルバイトをしていますか。」
項目3 「大学生活に満足していますか。」
項目4 「大学をやめたいと思ったことはありますか。」
項目5 「現在所属している大学が第一志望でしたか。」
項目6 「現在所属している学科で、希望通りの勉強はできそうですか。」
項目7 「卒業後に就きたい職業は決まっていますか。」

た。

手続き

大学への適応に関する7項目への回答は、「はい」、「いいえ」の2件法であり、SDSへの回答は、「ないかたみに」、「ときどき」、「かなりのあいだ」、「ほとんどいつも」の4件法であった。以上の質問項目から構成される質問紙を2004年6月中旬にそれぞれの大学の授業中に実施した。

## 結果と考察

### (1) 大学への適応に関する検討

最初に全調査対象の大学への適応について検討する。大学への適応を把握するために作成した7項目の質問項目に対する回答の結果について考察していく。

項目1「サークルで活動していますか。」では、63.3%の学生が「はい」と回答していた。

項目2「アルバイトをしていますか。」では、61.8%の学生が「はい」と回答していた。

項目3「大学生活に満足していますか。」では、47.6%の学生が「はい」と回答していた。

項目4「大学をやめたいと思ったことはありますか。」では、42.4%の学生が「はい」と回答していた。

項目5「現在所属している大学が第一志望でしたか。」では、29.3%の学生が「はい」と回答していた。また、「いいえ」と回答した学生は70.7%であり、不本意な入学をした学生の割合が高いことが伺える。

項目6「現在所属している学科で、希望通りの勉強はできそうですか。」では、48.0%の学生が「はい」と回答していた。

項目7「卒業後に就きたい職業は決まっていますか。」では、50.0%の学生が「はい」と回答していた。

### (2) 大学への適応に関するB大学とC大学の比較

つぎに、B大学とC大学を比較した結果について検討する。以下、項目ごとに考察して

いく。

項目1「サークルで活動していますか。」では、B大学の学生の74.4%、C大学の学生の56.0%が「はい」と回答しており、B大学の学生の比率が20%近く高い。

項目2「アルバイトをしていますか。」では、B大学の学生の41.5%、C大学の学生の75.2%が「はい」と回答しており、C大学の学生の比率が30%以上高い。

項目3「大学生活に満足していますか。」では、B大学の学生の48.1%、C大学の学生の47.2%が「はい」と回答しており、大学への満足については両者の差はほとんど認められなかった。

項目4「大学をやめたいと思ったことはありますか。」では、B大学の学生の30.9%、C大学の学生の50%が「はい」と回答しており、C大学の学生の方の比率が20%近く高い。

項目5「現在所属している大学が第一志望でしたか。」では、B大学の学生の26.3%、C大学の学生の31.2%が「はい」と回答している。この項目についてはC大学の学生の方の割合が5%弱高い。この結果は入試の形態による影響が大きいものと思われる。B大学は国立大学でありほとんどの学生がセンター入試を経てきている。センター入試の得点により、希望の大学を受験できなかった学生が多いのであろう。一方、C大学はAO入試や推薦入試で多くの学生を確保している。そのため、C大学の学生の方が第一志望の割合が若干ながら高かったのであろう。しかし、両大学ともかなりの割合の学生が不本意入学である可能性が高く、入学後の適応へのサポートを必要としていることが考えられる。

項目6「現在所属している学科で、希望通りの勉強はできそうですか。」では、B大学の学生の55%、C大学の学生の43.5%が「はい」と回答している。

項目7「卒業後に就きたい職業は決まっていますか。」では、B大学の学生の39.2%、C大学の学生の56.8%が「はい」と回答している。C大学の学生には初等教育を専攻する学

生が含まれており、そのため卒業後の進路が比較的明確になっているのであろう。

以上、B大学とC大学を比較してきたが、項目ごとの回答率の差異について統計的な検定を行っていないうえに、両者は国立と私立、文系と理系などの前提条件に差があるため、厳密な比較は困難である。本研究は大学間差を主要な検討課題としているわけではないのであくまでもそれぞれの大学の特徴を概観する程度の考察にとどめる。今後これらの条件を統制した大学間比較が必要となろう。

### (3) 抑うつ傾向の検討

本研究では大学への適応困難と関連する大学生の指標として抑うつ傾向を使用した。抑うつ傾向が高いほど周囲への適応が困難になるものと思われる。抑うつには状況的、神経症的、精神病的な抑うつ3つの種類があり、学生の抑うつ傾向は、これらのうちの状況的抑うつであることが多いと言われている(林, 1988)。抑うつ傾向を測定する尺度には、いくつかの下位因子から構成されるBDI-I (Beck Depression Inventory) などがあるが、本研究は抑うつ傾向の因子構造を検討することを目的としていないため、単一因子から構成されるSDSの項目を使用した。

SDSによって測定される抑うつ傾向は、正常値が23～47であり、53以上でうつ病と診断される。本研究の調査対象全体の平均値は43.61であり、正常値の範囲内であった。中央値は44.00であり、最頻値は35.00であった。

それぞれの大学ごとに見ていくと、B大学の学生の平均値は41.88、C大学の学生の平均値は44.75であった。両者ともに正常値の範囲内である。中央値はB大学の学生は42.00、C大学の学生は46.00であり両者ともに正常値の

範囲内である。最頻値はB大学の学生は44.00、C大学の学生は50.00である。ただし、C大学の学生の最頻値は正常値の範囲を超えており、うつ病ではないものの神経症傾向の範囲に位置していた。

### (4) 大学への適応と抑うつ傾向の関連

最初に、調査対象全体の大学への適応と抑うつ傾向の関連について検討する。大学への適応を測定する項目と抑うつ傾向の相関係数をTable 2に示した。抑うつ傾向と正の相関があったのは項目4「大学をやめたいと思ったことはありますか。」のみであった。抑うつ傾向と1%水準で負の相関があったのは項目3「大学生生活に満足していますか。」と項目7「卒業後に就きたい職業は決まっていますか。」の2項目であった。5%水準で負の相関があったのは項目5「現在所属している大学が第一志望でしたか。」と項目6「現在所属している学科で、希望通りの勉強はできそうですか。」であった。この結果は、大学に不適應であるほど抑うつ傾向が高く(項目4)、大学に適應している(項目3)か、または将来の目標が明確である(項目7)ほど抑うつ傾向は低いということを示している。また、大学や学科が自分の志望通りであるほど抑うつ傾向は低い(項目5, 6)。以上の結果より、抑うつ傾向を低下させるためには、大学をやめたいと思う割合を低下させること、大学生生活への満足度を高めること、希望の職業が決まっている割合を高めること、すなわちキャリアサポートの充実が必要になる。佐藤(2001)は、大学進学に際して積極的な進学動機であるほど大学への適應が高く、消極的な進学動機は将来への見通しの欠如と関連する場合に適應を低めることを報告している。不本意入学で

Table 2 大学への適応と抑うつ傾向の相関 (全体)

	項目1	項目2	項目3	項目4	項目5	項目6	項目7
抑うつ傾向	-.13	-.10	-.31**	.31**	-.14*	-.17*	-.23**

\* p<.05, \*\* p<.01

あり将来への目標が明確でない学生に対するサポートは特に必要であろう。ところで、項目1「サークルで活動していますか。」、項目2「アルバイトをしていますか。」と抑うつ傾向の間には関連が認められなかった。サークルやアルバイトを通じた人間関係がソーシャルサポートの役割を持つことはじゅうぶん考えられることではあるが、全体での分析では抑うつ傾向との関連が見られなかった。ただし、項目2「アルバイトをしていますか。」についてはB大学とC大学に差異があったので後ほど検討する。

つぎに、B大学の学生の大学への適応と抑うつ傾向の関連について検討する。B大学の学生の大学への適応を測定する項目と抑うつ傾向の相関係数をTable 3に示した。抑うつ傾向と正の相関があったのは、項目4「大学をやめたいと思ったことはありますか。」のみであった(1%水準)。抑うつ傾向と負の相関があったのは、項目3「大学生生活に満足していますか。」と項目6「現在所属している学科で、希望通りの勉強はできそうですか。」であった(1%水準)。B大学の調査対象は理科系の学部にも所属しており、勉強したい内容が明確となっているのであろう。

最後に、C大学の学生の大学への適応と抑うつ傾向の関連について検討する。C大学の学生の大学への適応を測定する項目と抑うつ傾向の相関係数をTable 4に示した。抑うつ傾向と正の相関があったのは、項目4「大学をやめたいと思ったことはありますか。」のみで

あった(1%水準)。抑うつ傾向と1%水準で負の相関があったのは、項目3「大学生生活に満足していますか。」、項目7「卒業後に就きたい職業は決まっていますか。」の2項目であった。項目2「アルバイトをしていますか。」と抑うつ傾向には5%水準で負の相関があった。C大学の学生の75.2%が項目2に「はい」と回答しており、アルバイトをしている学生の方が抑うつ傾向が低いことは、アルバイトの経験が学生の心理的な健康にプラスの影響を与えていることを示している。しかし、気をつけなければならないことは、アルバイトが学生の心理的な健康を高めても大学への適応を高めるわけではないということである。C大学の学生の項目2「アルバイトをしていますか。」と項目3「大学生生活に満足していますか。」の相関を見たところ、両者には1%水準で負の相関が認められた( $r=-.20$ )。この結果は、アルバイトをしている学生ほど大学への満足度が低いということを示している。B大学の学生では、項目2と項目3の間に有意な相関は認められなかった( $r=.05$ )。あるいはC大学の学生は大学生生活に満足していないために代償としてアルバイトに精を出していると考えられることもできる。学生の退学理由としてアルバイトが面白くなり、アルバイトを正業として選ぶ場合が見受けられるが、このような学生の割合を減らすためにも学生の大学生生活への満足度を高めるためのサポートが必要とされよう。

Table 3 大学への適応と抑うつ傾向の相関 (B大学)

	項目 1	項目 2	項目 3	項目 4	項目 5	項目 6	項目 7
抑うつ傾向	.01	-.18	-.38**	.33**	-.13	-.29**	-.21

\*\* p<.01

Table 4 大学への適応と抑うつ傾向の相関 (C大学)

	項目 1	項目 2	項目 3	項目 4	項目 5	項目 6	項目 7
抑うつ傾向	-.17	-.18*	-.26**	.25**	-.16	-.07	-.30**

\* p<.05, \*\* p<.01

Table 5 大学をやめたいと思った理由

- 
- a. 目的意識のズレ
- ・自分の思っていた大学と違うから。
  - ・別の大学への進学を考えているため。
  - ・自分に合っていないと思ったから。
  - ・自分のためになっていないと思ったから。
  - ・希望した大学，学科が違うから。
  - ・志望大学ではなかったから，入学当時はやめたいと思っていた。
  - ・自分の学びたい分野ではなかったから。
  - ・いる意味がはっきりしない。
- b. 人間関係
- ・高校とのギャップ（クラスがないので団結性がなかった）。
  - ・つまらない人間が多くて疲れる。
  - ・人間関係に疲れた。
  - ・友達とうまくいかなかった時。
  - ・入学当初友達ができなかった時。
  - ・人と関わるのが嫌になったから。
  - ・一部の友人関係に疲れた。
  - ・人間関係の疲れで精神状態が不安定になってしまった。
- c. 学校・授業への不満
- ・授業がつまらないから。
  - ・自分の勉強したいと思った授業の方向と違っていた。
  - ・やりたい勉強ができる講義が少ない。
  - ・高校などちがってやはり授業がつまらない。力になる授業をしてほしい。
  - ・勉強が意味わからないから。先生が微妙…。
  - ・先生にも不満だし，授業も何やっているかわからない。
  - ・学びたい事が学べない。授業の内容があまり良くない。
  - ・空き時間をつぶす場所がない（図書館は遠い）。校舎が私立なのに古すぎる。
- d. 学力とのズレ
- ・正直，自分にあったレベルではない。
  - ・教授の簡単な質問にも答えられない生徒がいたとき。
  - ・思うように勉強ができなかった。
  - ・入学したての頃は，超つまんなかったから。
  - ・刺激がたんね～。
  - ・レポートが大変だった時。
  - ・テストが大変だし，楽しいことが少ないから。
  - ・勉強がおもしろくない。ついていけない。
-

(5) 自由記述結果の検討

項目4「大学をやめたいと思ったことはありますか。」に「はい」と回答した学生に対して理由を尋ねた。理由を内容から分類すると、a. 目的意識のズレ(やりたいことができない, 何がしたいかわからない等), b. 人間関係(友だちができない, 友だちとうまくいかない等), c. 学校・授業への不満(授業がおもしろくない, 設備が古い等), d. 学力とのズレ(授業のレベルが低い, 授業についていけない等)の四つの要因があげられる。それぞれの理由ごとに自由記述項目を整理した結果をTable 5に示した。ただし, 自由記述項目は全体より代表的なものを抜粋した。以下, それぞれの要因ごとに考察する。

a. 目的意識のズレについては, まず入試段階で目的意識をはっきりさせ, 意欲を高めることが必要となる。AO入試や推薦入試による入学者の割合をさらに増加させることは一つの解決策であろう。また, 学部や学科改革を通して受験者にわかりやすく, 目的意識を持たせやすい学部学科づくりが必要とされる。さらに, 大学の新生入生に対して大学での目標と将来の目標を明確化し, 両者を適合させるような初年次教育が必要とされる。

b. 人間関係については, 入学時点で友だちづくりができるような環境づくりが効果的であろう。多くの大学で新生入生に対するオリエンテーションを行っており, なかには宿泊を伴う場合もあるが, 教務を中心とした学生への情報伝達を主としている場合が多く, 学生の人間関係づくりを促進する目的が主である場合は少ないのではないだろうか。また, 人間関係づくりを促進するうえで学生の居場所づくりも課題となろう。前述した通り, 濱名(2005)は, 学生の授業時以外のキャンパスでの過ごし方といった適応面では, 4月~10月にかけてほとんど変化が見られないということ報告している。この結果は入学時に居場所を見つけれない学生はその後居場所を見つけることも難しいということを示している。大学に居場所がなければ親密な人間関係

を築くことは難しいだろう。太田・桜井(2003)は, 学生にとっての居場所の乏しいキャンパスが学生の孤立感を深め, 学生の心理的な問題を誘発しやすいことを指摘している。物理的に学生の居場所の乏しいキャンパスである場合, 学生の適応に関して大学側のじゅうぶんな配慮が必要となろう。

c. 学校・授業への不満については, 授業評価などが導入されるにつれて, 授業への不満に対する対応がはかられていくものと思われる。ただし, 不満を解消する以前に不満を汲み上げる体制づくりが必要であろう。授業評価はその一つであるが, 大学の設備や窓口での対応など多くの不満が自由記述に見られた。不満を汲み上げる体制が無いことについての指摘もあった。学生の不満を汲み上げる体制を整備することが必要であり, 汲み上げた不満に対して掲示板などを通して回答することも重要である。そのような体制をつくるだけでも不満の多くは解消される可能性がある。

d. 学力とのズレについては, 入学者間で今後ますます学力差が生じるであろうし, 基礎学力不足の入学者も増加することが予想される。この問題に対してはレメディアル教育や専門への導入教育等による対応が必要である。

以上, やめたいと思った理由に関する自由記述の分析を行った。これらの四つの分類を見ると, 大学の教職員は学生の変化に合わせた的確な対応が求められているといえる。大学の現状について倉石(2001)は, 「高度成長期, 社会が成熟化に向かうとき, 高等教育への要請も高かった。しかし受け入れる側の大学は学生に対して, 「学んで当然」「教員の指導に従って当然」「意見を明確に述べて当然」といった姿勢を崩さなかった。ごく限られたスーパーエリートが門をくぐっていた戦後直後の雰囲気そのまま受け継いでいた。」と述べている。倉石の指摘について新生入生を例として見ていこう。従来, 多くの大学で, 学生サービスはそれぞれの部署ごとに分かれて提供されてきた。学生生活については学生部, 授業の履修に関しては教務部, 就

職に関しては就職部というようにである。しかし、とりわけ入学直後の学生は大学に対する理解が低く、大学で提供されるサービスの全体像を把握していない場合がしばしばである。自分の要求がどの部署に当てはまるのかということがわからない、そのためどこにも相談に行けず、様々な登録の締め切りに間に合わないというケースがしばしば見受けられる。大学の教職員にとっては既知の事柄であっても、新入生にとっては初めてだらけのことであり、わからないのは当然であるとも言える。このような現状の中、今までサポーターの役割を担ってきたのがサークル等の上級生であり、また同級生であった。しかし、時代とともに学生の対人関係のあり方が変化しており、上級生や同級生との間に親密な関係を築くことが困難な学生が増加している。前述した通り山下(2004)は、学生相互によるサポートシステムを大学が組織化する試みについて報告している。このようなサポートシステムを整備することは効果があるだろう。メール世代の大学生にとってメールによる履修登録やそのシステムの整備も効果を持つであろう。さらに、学生の総合的なサポートを目的とするサポートセンターを設置する試みも行われており(宇留田, 2005)、大学全体のコンセンサスを得ることで効果を発揮するものと思われる。

### まとめと今後の課題

大学生の心理的問題に関しては、従来、無気力を中心としたアパシーに関する研究(鉄島, 1993)、進路決定の困難に関する研究(若松, 2001)などがあるが、これらの研究は大学生の内的要因を重視しており、必ずしも外的要因である大学との関連のうえで論じられてはいない。本研究は大学生の適応について内的要因のみではなく大学生活を中心とする外的要因を含めて検討した。

本研究は大学生を対象として大学への適応に関して検討することを目的とし、二つの大

学の学生207名に対し大学への適応を測定する7項目と抑うつ傾向を測定するSDSから構成されるアンケート調査を実施した。結果を以下の三つの点から検討した。第一に、大学への適応を測定する7項目の回答頻度について検討した。項目3「大学生活に満足していますか。」では、47.6%の学生が「はい」と回答しており、半数弱の学生が大学生活に満足していることが明らかとなった。また、項目4「大学をやめたいと思ったことはありますか。」では、42.4%の学生が「はい」と回答しており、4割強の学生が大学をやめたいと思ったことがあるということが明らかとなった。さらに、項目5「現在所属している大学が第一志望でしたか。」では、29.3%の学生が「はい」と回答しており、「いいえ」と回答した学生は70.7%であり、国立大学、私立大学を問わず不本意な入学をした学生の割合が高いことが明らかとなった。第二に、大学への適応と抑うつ傾向の関連について検討したところ、大学に不適応であるほど抑うつ傾向が高いこと、大学に適応しているか、将来の目標が明確であるほど抑うつ傾向は低いことが明らかとなった。そのため、学生の抑うつ傾向を低下させるためには、大学をやめたいと思う割合を低下させること、大学生活への満足の度合いを高めること、希望の職業が決まっている割合を高めること、すなわちキャリアサポートの充実が必要であることが示唆された。学生の抑うつ傾向への対応としては、主として心理療法を中心とする介入が行われているが(白石, 2005)、以上のように環境要因を調整することによって抑うつ傾向を低減できる可能性があるのではないだろうか。第三に、項目4「大学をやめたいと思ったことはありますか。」に「はい」と回答した学生に対して理由を尋ね、その理由を内容から分類したところ、a. 目的意識のズレ、b. 人間関係、c. 学校・授業への不満、d. 学力とのズレの四つの要因が見いだされ、それぞれの要因と学生の大学への適応について考察した。

本研究では学生の不適応の指標として抑うつ



つ傾向を使用した。が、学生にとって抑うつ傾向が特性的であるのか状態的であるかということはわからない。すなわち、項目4を例にとると大学への適応が困難なため大学をやめようと思ったから抑うつ傾向が高いのか、逆に以前から抑うつ傾向が高いために大学への適応が困難になりやめたいと思ったのかについては明らかにできなかった。今後は適応困難に至る過程を継時的に明らかにしていくことが必要であろう。また、本研究では学生の大学への適応状況を測定するために7項目の質問項目を作成したが、適応状況をより広範に測定するためにはさらに質問項目を充実させていく必要がある。以上の点を今後の課題としたい。

#### 付 記

本研究の内容の一部は、日本学校心理学会第7回大会（2005年7月27日～28日、東京）において発表した。

#### 引用文献

- 福田一彦・小林重雄 1983 日本版SDS - 自己評価式抑うつ性尺度 - 三京房
- 濱名篤 2005 学生の多様化するニーズに対応した初年次教育 財団法人私学研修福祉会主催平成17年度大学の教育・授業を考えるワークショップ資料。
- 林潔 1988 学生の抑うつ傾向の検討 カウンセリング研究, 20, 162-169.
- 近藤勝直 2005 最近の3年間における授業満足度の推移について - FD活動の成果の検証 - 流通科学大学教育高度化推進センター紀要, 1, 17-24.
- 倉石哲也 2001 学生の多様化と学生支援: 学生相談から考える学生対応 武庫川女子大学学生センター紀要, 11, 31-39.
- 太田裕一・桜井育子 2003 コミュニティと危機介入 - 二つのキャンパスの学生相談における比較 - 学生相談研究, 24, 119-128.
- 佐藤典子 2001 音楽大学への進学理由の認知と進学後の適応について 教育心理学研究, 49, 175-185.
- 重松晴美 2005 青年期における孤独感および内的

- 対象の想起に関する研究 - 境界例心性を通して - 心理臨床学研究, 22, 659-664.
- 白石大介 1998 大学生の幼稚化現象 - その背景と課題 - 武庫川女子大学学生センター紀要, 8, 9-21.
- 白石智子 2005 大学生の抑うつ傾向に対する心理的介入の実践研究 - 認知療法による抑うつ感軽減・予防プログラムの効果に関する一考察 - 教育心理学研究, 53, 252-262.
- 鈴木研二 2004 見られる自分 - マザ・コンと自立の臨床発達心理学 - 創元社 Pp.284.
- 鉄島清毅 1993 大学生のアパシー傾向に関する研究 - 関連する諸要因の検討 - 教育心理学研究, 41, 200-208.
- 宇田光 2005 大学講義の改革 - BRDレポート方式の提案 - 北大路書房
- 宇留田麗 2003 異職種間の協働による学生相談活動を成立させる方略の探索 学生相談研究, 24, 158-171.
- 宇留田麗 2005 大学教員と臨床心理のコラボレーションによる大学生の修学支援 心理臨床学研究, 22, 616-627.
- 若松養亮 2001 大学生の進路未決定者が抱える困難さについて - 教員養成学部の学生を対象に - 教育心理学研究, 49, 209-218.
- 山下京子 2004 大学におけるキャンパス・サポーター・システムの導入に関する実践的研究 学生相談研究, 25, 21-31.